アメリカ自然主義文学に表現される人間の心的構造について

On Human's Mental Structure Described in American Literary Naturalism

井　上　稔　浩
(Toshihiro Inoue)

1

アメリカ社会は1890年にフロンティアの消滅という歴史的な瞬間を迎えている。それまでの開拓期にあったアメリカ社会は、開拓が終わり都市化した地域と未開拓である自然状態の地域の二重に分裂した状態にあった。そしてアメリカ社会はこの二重状態の境界線であるフロンティアを西へ押し進めること、すなわちフロンティアより西に位置する未開の地を開発し文明世界へと編入していくプロセスによってそれ自身を発展させてきた。そしてフロンティアの消滅後、アメリカは国家の主軸であった農本主義的な社会構造から脱却し、資本によって駆動される産業資本社会へと変貌を遂げていった。この社会構造の転換とほぼ同時期にアメリカ自然主義文学というジャンルに分類される文学形式が登場しているのだが、世紀転換期という激動の時代に活躍した自然主義作家たちが、社会構造の変化に伴って個人に作用する権力と、それに随伴する個人の内面変化をどのように捉えていたかは重要な検討課題となる。

2

代表的なアメリカ自然主義作家の一人である Jack London (1876-1916) の膨大な作品群の中で、彼の代表作とされる *The Call of the Wild* (1903) や *White Fang* (1906) においては、一匹の犬であれ狼であれ、それが全く異なる環境に投げ込まれることで物語が推移していく。*The Sea-Wolf* (1904) においても、主人公の Humphrey Van Weyden は世俗を離れた文学的ロマンスにのみ心を馳せることを許される貴族階級に属しており、自己の生存のために労働することとは縁のない生活をしていた。だが船の事故に遭遇し、漂流中を the Ghost 号の船長 Larsen に助けられることで彼の世界は一変することになる。彼は船上で自らの生命を維持すべく、それまで経験のなかった暴力的環境に自己を適合させることを余儀なくされるのだが、力に裏付けされた男性性のみが価値付けられる世界の中で、Humphrey は女性に囲まれて育った自分の過去を振り返ることになる。

I have never placed a proper valuation upon womankind. For that matter, though not amative to any considerable degree so far as I have discovered, I was never outside the atmosphere of women until now. [1]

Humphrey は他の船員から "pore little mamma's darlin'" (*The Sea-Wolf* 43) として侮辱を受け、自らの男性性を抑圧されることで反作用的に自分が男性であることを初めて認識しているのだが、このことは翻って彼はそれまで女性を自分に比する異性として認識することはなく、性意識からは遮断された世界で育ってきたことをも物語っている。同様に Frank Norris (1870-1902) の *McTeague* (1899) においても、ヤミ歯医者の主人公 McTeague、及び後に彼の妻となる Trina Shippe は性意識とは無縁の存在として読者の前に登場してくる。だが McTeague の場合、ある日患者として治療にやって来た Trina は彼の世界に "feminine element"[2] を初めてもたらした女性として認識されるのだ。麻酔で意識を失い、無防備な状態にある彼女を目の前にして、McTeague は初めて Trina を情欲の対象としての異性

として意識することになる。

Blindly, and without knowing why, McTeague fought against it, moved by an unreasoned instinct of resistance. Within him, a certain second self, another better McTeague rose with the brute; both were strong, with the huge crude strength of the man himself.(*McTeague* 30)

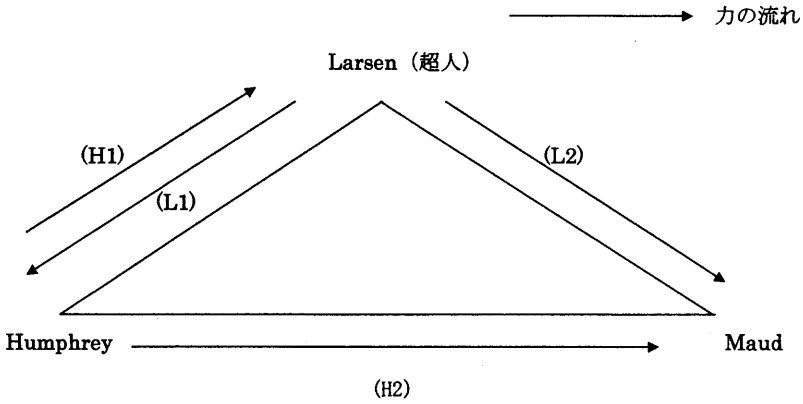
Trina が登場するまでの McTeague の生きる世界は Humphrey と同様に、性差に対する意識からは隔絶されたものであったことはここからも容易に想像できる[3]。すなわち *The Sea-Wolf*、或いは *McTeague* においても、主人公の主体は性に対する志向性からは遮断された、いわゆる Thomas Hobbes 流の自然状態として作品に登場してくるのである。

しかし性意識が資本主義化された経済社会にとって、大きな意味を持つことは明らかである。第一に性意識は異性愛を構成する基本要件であり、これがなければ資本社会の基盤を構成する労働力、そして同時に消費者としての人口を確保できなくなる。また、家父長制によって支えられた男女一対によって構成される家族という財政的単位がなければ、私有財産の相続を確実にすることも不可能となってしまう。従って、性的に白紙状態にある主体に対して、如何に性意識を刻み込むかは資本社会発展期にあったアメリカ社会にとって急務であったと考えられる。そして当時の作家たちがこのプロセスを如何に描いているかが次の重要な検討課題となる。

3

さて Humphrey は the Ghost 号において、彼と同様 Larsen に漂流中を助けられた Maud Brewster と出会うことになる。彼女は Humphrey と同じく文学者としての素養を持っており、彼は Maud に対しては同質であるという意識を持っている。だが性意識的に成熟していない Humphrey は、当初は Maud に対して彼女を性の志向対象としては認識するに至らない。その結果 Maud は彼に対して

情欲の対象としては機能しないのだが、Humphrey に対して父的役割を持ち[4]、常に彼を抑圧しようとする超人的な Larsen は Humphrey の目の前で自分の力を誇示すべく Maud をレイプしようとする。London はその時の Humphrey について "The knowledge that I loved her rushed upon me with the terror . . ."(*The Sea-Wolf* 166) と描写しているが、ここでは Humphrey の Maud に対する愛情が Larsen からの抑圧エネルギーを契機として発生していることが読みとれる。



Larsen からの抑圧（L1）によって Humphrey の内部に生成する鬱積したエネルギーは、肉体的に彼より優位に立つ Larsen に対して反発エネルギー（H1）となって直接向けられることはない。Humphrey より先に、Maud をレイプしようとした Larsen は彼女に対して Humphrey より先に志向エネルギー（L2）を発生させているのだが、現実側面で Larsen に対抗することができない Humphrey は間接的に Larsen より優位に立つべく、反発エネルギー（H1）を志向エネルギー（H2）に転換させ、それを同じく Larsen が欲望する Maud に向けているのである。

ここでは Humphrey の Maud への欲望は Larsen の彼女に対する欲望が先にあって初めて成立している。従って Humphrey の女性に対する志向性は先験的に存在するものではなく、Larsen からの抑圧が起点となり、この抑圧に対する代補

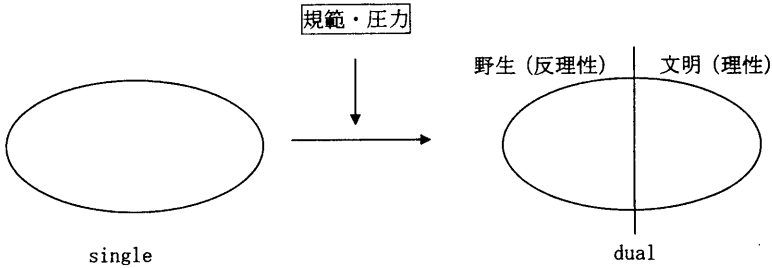
意識が Maud という女性に対する愛情へと変換されているのである。この場合、規範からの圧力が高ければ高いほど、代補的対象への志向性が強くなることは明らかであろう。同様に McTeague の場合も、性に対して強烈な禁止を求める当時のヴィクトリア朝的規範からの圧力あったからこそ、逆に Trina によって顕在化された禁止された性への強い志向が生じているのである。

4

次に強力な規範によって性意識に目覚めた主体の構造に目を向けてみよう。McTeague の場合、その主体の構造は既に示したように、規範に従おうとする理性的主体と、それに対する反理性的主体の二重に分裂していた。同じく the Ghost 号での規範として君臨し、同時に抑圧者でもある Larsen に対する Humphrey の主体の構造について、London は次のように描写している。

For the first time in my life I experienced the desire to murder . . . I was frightened when I became conscious that I was seeing red, and the thought flashed through my mind: was I, too, becoming tainted by the brutality of my environment? ··· I, who even in the most flagrant crimes had denied the justice and righteousness of capital punishment?(*The Sea-Wolf* 61)

ここでは自らの中に生じた殺意に驚愕する Humphrey が描かれているのだが、彼の主体構造も McTeague 同様、理性的主体とそれと対極に位置する反理性的主体、しかもそれは他者の肉体を暴力的に直接ターゲットにする二重の主体に分裂しているのである。



The Call of the Wild	Dog	→	Dog/Wolf	→	Wolf（原始の圧力）
White Fang	Wolf	→	Wolf/Dog	→	Dog（文明の圧力）

例えば London の作品の中で狼化していく Buck や犬化していく White Fang においては、何らかの強い規範、或いは圧力がそれぞれの主体に作用した結果、主体の中に二重構造が生成されている。同様に *The Sea-Wolf*、そして *McTeague* においても、それぞれの主人公が内面に自覚せざるを得ない反理性と理性との終わりのない葛藤が描かれている。これらの構造が野性を飼い慣らし、文明的領域を拡張しようとしていた開拓期にあったアメリカ社会の空間的構造と形式的に同一性を持っていることは明らかであろう。

5

Vandover and the Brute (1914) においても Norris は父の強い規範の圧力を受けて育った Vandover が、性意識をめぐって二重に分裂していく様を事細かに描写している。

Far down there in the darkest, lowest places he had seen the brute, squat, deformed, hideous; he had seen it crawling to and fro dimly, through a dark shadow he had heard it growling, chafing at the least restraint, restless to be free. For now at last it was huge, strong, insatiable, swollen and distorted out

of all size, grown to be a monster . . . grovelling, perverse, horrible beyond words.[5]

ここで問題になるのは、それぞれ二重に分裂した主体がどのように自立的に駆動されるのかということである。原始社会において、異なる部族間を通約する貨幣的役割を担っていたのが流通する女性の身体であったが、資本主義社会における貨幣と女性、つまり金とセックスの問題は "American Dream" という言葉に集約されている。この言葉は 1930 年代の造語ではあるが[6]、その中心となる「成功して幸せな結婚をする」というモチーフは資本の発達した都市社会の出現があって初めて可能となる[7]。ここで London の *Martin Eden* (1909) を例にとって "American Dream" にかかわって、二重に分裂した主体構造を見ることにする。Aurther Morse を不良から救ったことがきっかけで上流階級の家に招かれ、そこで出会った Ruth Morse に恋心を抱く貧しい船員の Martin を London は次のように表現している。

Here was adventure, something to do with head and hand, a world to conquer ··· and straightway from the back of his consciousness rushed the thought, conquering, to win to her, that lily-pale spirit sitting beside him.[8]

作家として成功し、Ruth と結婚することを Martin は彼自身の "American Dream" として捉えている。そして彼ら二人の関係は、Martin が Ruth を征服すべき "a pale gold flower"(*Martin Eden* 35) という自然のイメージになぞらえる一方で、Ruth は Martin に対し "wild thing"(*Martin Eden* 106) を飼いならすという動機を持つことによって成立している。ここでは双方が前述の開拓時代にアメリカ人が自然の世界に対して抱いていた思いによって結び合わされているのだが、問題は Martin 自身が Ruth にふさわしい男になるべく、「洗練された都市的部分」と「洗練されていない野生の部分」に分裂していく状況である。

All his life, up to then, he[Martin] had been unaware of being either graceful or awkward. Such thoughts of self had never entered his mind.(*Martin Eden* 37)

Martin は Ruth を目の前にして "a crying need to be clean"(*Martin Eden* 81) を感じたと London は描写しているが、彼にとって船員時代の習慣、すなわち野性的部分はフロンティア時代の未開拓の領域と同じく、消滅させるべき部分であり、彼はそれまで一度もしたことのなかった歯磨きや冷水浴びの習慣を身に付け、つとめて Ruth に合わせた文明的部分を自己の内部に広げようとする[9]。一方 Martin の船員言葉を矯正し、正しい文法を教えようとする Ruth を Martin は "teacher"(*Martin Eden* 158)と仰ぎ、彼女に気に入られるために進んで彼女の "slave"(*Martin Eden* 277) となるのである。ここでは支配者としてのブルジョワ階級の Ruth、被支配者としての労働者階級の Martin という構図が成立しており、結局のところ Martin は彼自身の "American Dream" を追い求める過程において、当時の資本社会の中核にあったブルジョワ階級の論理をそのまま自ら進んで受け入れるだけでなく、それを補強する役割をも担ってしまうのである。

Theodore Dreiser (1871-1945) の示す Carrie Meeber も Martin と同じく、自らの心的内部にフロンティアを設定し、あくなき自己の文明化を目指す女性として読者の前に登場してくる。彼女の夢も田舎的な自己を捨て去り、都会で女優として成功を治め、幸せな結婚をするというものだ。

. . . wherever she encountered the eye of one[shopgirl of The Fair] it was only to recognize in it a keen analysis of her own position --- her individual shortcomings of dress and that shadow of manner which she thought must hang about her and make clear to all who and what she was. A flame of envy lighted in her heart. . . . and she longed for dress and beauty with a whole heart.[10]

ここで見逃せないのは彼女のモノに対する欲望は前述の Humphrey の Maud に

対する欲望と同じく主体としての欲望ではあり得ず、彼女の欲望の根底には他人の欲望のミメーシスがあるということである。従って彼女の欲望の対象は決して最終的な実体を持つことはない[11]。上流階級の Ruth にふさわしい男になるべく努力する Martin 同様、Carrie が目指す自分の理想像は、決して到達することのない極点に遠ざけられている。同時に彼女にとっての負の部分、すなわち洗練されない田舎的部分は決して消失することなく、その結果彼女は飽くなき "dress and beauty" を求める自動運動、具体的には消費行動に自らを委ねることになる。物理的なフロンティアは限界があり 1890 年に終焉を迎えたが、Martin や Carrie の心的内部に刻み込まれた象徴的フロンティアにはそれがあり得ず、彼らの終わりなき自己の文明化行為は、そのまま資本社会を維持する行為、階級社会の維持、消費行動へと接続されていくのである。

6

最後に *McTeague* と *Vandover and the Brute* に見られる主体の二重構造を資本社会の要である貨幣流通という点から考えておきたい。McTeague、Vandover は両者とも厳格な父からの過重により、性意識に関して理性的な部分と反理性的な部分に分裂していた。その結果、性という事象は彼らにとって禁止された対象であるにもかかわらず、禁止されているが故に同時に魅惑の対象としても現象することになる。そして McTeague は Trina にキスをすることによって、Vandover は Ida Wade と肉体関係を持つことでそれぞれタブーを破るのだが、この行為は同時に厳格な規範を乗り越えるという快楽を彼らにもたらすことになる。だが McTeague の場合、性のタブーは結婚によって解消され、McTeague から見て禁止された部分を失った Trina はもはや彼に対して情欲の対象として機能しない。徐々に薄れていく McTeague の愛情を確保するべく、Trina は既に失われた禁止された部分を偶然宝くじで手に入れた 5000 ドルによって代補し、自らを再び McTeague の志向の対象として確保しようとする。

It had been a dreadful wrench for Trina to break in upon her precious five thousand. She clung to this sum with a tenacity that was surprising . . . she regarded it as something almost sacred and inviolable. Never, never should a penny of it be spent.(*McTeague* 154)

Trina は 5000 ドルをすべて金貨に交換するのだが、その金貨は "virgin metal, the pure, unalloyed ore"(*McTeague* 44) として表現されている。すなわち Trina は彼女自身の失われた処女性を金貨に投射した上で、それを回収、確保しようとしているのである[12]。同時にこの金貨は "something almost sacred and inviolable" として McTeague の視界からは遠ざけられており、Trina の第二の秘めたる部分として機能することになる。職を失い、収入源を失った McTeague にとって、処女性を投影された貨幣を Trina から無理矢理奪取し、それを蕩尽する行為は再び過去の性的タブーを犯す快楽を呼び覚ますことに接続されている[13]。

一方 Ida Wade の事件を理性によって深く後悔する Vandover は再び肉体的性に対するタブーを現実レベルで破ることによって快楽を得ることを自ら否定し、その代補行為として厳格な父が禁欲的な生活によって蓄積した貨幣を、父の規範に反して浪費しようとする。この「浪費」というタブーは "the new pleasure for which he had longed, the fresh violent excitement"(*Vandover* 287) として、彼に同じく快楽をもたらす契機になっている。Norris は Vandover が "The impulses to spend quickly"(*Vandover* 290) を持っていたと示しているが、彼の意識の中では現実局面での性的快楽の禁止が McTeague 同様、貨幣を放棄することで得られる快楽の追求へと転化しているのである。すなわち、当時のヴィクトリア朝的伝統精神は性に対する意識を抑圧することで、その代補行為として資本の自己増殖に必須である貨幣流通を確保しようとしていたのである。

これまで見てきたように、アメリカ自然主義文学に描かれる個人の心的構造には二重性という特徴が共通して描かれている。この個人の内面における二重構造はいずれの場合も強い規範による強い圧力によって自然状態にあった主体が構造化され生じている。そしてそれぞれの作品の中では、この二重構造により各主体が個人レベルで性意識を起点として異性愛、階級社会の維持、消費行為、貨幣流通の主体として駆り立てられ、資本社会に収斂されていく様が描かれている。すなわちアメリカ社会は、それまでの社会の発展の原動力であった空間的フロンティアに根ざした国家の空間的二重性を失ったとき、個人の心的構造を二重化し、そこに象徴的なフロンティアを確保することによって、新たな都市国家としてのさらなる発展の原動力を確保しようとしたのである。

そして特筆すべきは空間的なフロンティアは物理的空間に根ざしていたが故に限界点を迎える運命にあったが、主体の中に組み込まれた二重構造は、その象徴性ゆえに終焉が剥奪されているということである。この点において、飽くなき利益追求を旨とする資本経済を加速させるにあたって、二重に分裂した主体の存在は国家にとって非常に有益であったことは言うまでもない。この意味でフロンティアの消滅を契機とするアメリカ社会の産業化と、そこでの個人の内面を描いたアメリカ自然主義文学の発生という事象には歴史的な必然があったのだと言えるのである。

---

[1] Jack London, *The Sea-Wolf* and Other Stories (New York: Penguin Books, 1989) 106. 以下本文の引用はこのテキストから、括弧付きにてページを示す。

[2] Frank Norris, *McTeague: A Story of San Francisco* (New York: Penguin Books, 1994) 27. 以下本文の引用はこのテキストから、括弧内にページを示す。

[3] "Trina becomes 'the woman,' the primal force who destroys the Adamic McTeague." John J. Conder, *Naturalism in American Fiction: The Classic Phase* (Kentucky: The UP of Kentucky, 1984) 70.

[4] "The ambivalence he feels toward Larsen is like that of a child toward a bad father." Joan D. Hedrick, *Solitary Comrade: Jack London and His Work* (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1982) 120.

[5] Frank Norris, *Vandover and the Brute* (Garden City, New York: Doubleday, Page & Company, 1914) 215. 以下本文の引用はこのテキストから、括弧内にページを示す。

[6] Frederic I. Carpenter, *American Literature and the Dream* (New York: Philosophical Library, Inc., 1955) 5.

[7] Cf. "Carrie's need for men always includes marriage and reflects her desire for respectability as well as for security." Thomas P. Riggio, "Carrie's Blues," *New Essays on Sister Carrie* ed. Donald Pizer (New York: Cambridge UP, 1991) 33.

[8] Jack London, *Martin Eden* (New York: Penguin Books, 1984) 52. 以下本文の引用はこのテキストから、括弧付きにてページを示す。

[9] George M. Spangler, "Divided Self and World in Martin Eden," *Critical Esssays on Jack London* ed., Jacqueline Tavernier-Courbin (Boston: G.K.Hall & Co., 1983) 157.

[10] Theodore Dreiser, *Sister Carrie* (New York: Signet Classic, 1961) 27.

[11] ". . . all values are comparative and stand for quantity, not substance, in the strangely abstract world of this naturalist novel." Harold Kaplan, *Power and Order: Henry Adams and the Naturalist Tradition in American Fiction* (Chicago: U of Chicago P, 1981) 92.

[12] ". . . and the prevailing economic virtue of acquisitiveness might be imagined as a weirdly sensual narcissism." J. C. Levenson, "*The Red Badge of Courage* and *McTeague*: Passage to Modernity," *The Cambridge Companion to American Realism and Naturalism: Howells to London*, ed. Donald Pizer (Cambridge: Cambridge UP, 1995) 173.

[13] ". . . the novel's first line of conflict derives from the major characters' struggle to observe social taboos (their moral standards) in the face of sexual temptation." Conder, 71.